

奈良県
「こころと生活等に関するアンケート」
活用マニュアル

奈良県教育委員会

1. はじめに

今、学校現場で対応が求められる子どもたちの課題は、不登校、いじめ、反抗や暴力、発達の偏り、家庭での虐待、貧困など実に多様です。こうした課題を抱える子どもたちに対しては、多様な専門性をもったスタッフがチームで取り組むことが大切です。そしてこのような子どもが抱える課題の背景には自己肯定感の低下や歪みといった子どもの「こころの状態」が大きく関わっているといわれています。また、子どもの課題は、日々の“ちょっとした変化”として現れがちです。この“ちょっとした変化”に気付き、必要な支援につなげるのは、日常的に子どもに接する学級（HR）担任の力量にかかっているといっても過言ではありません。その意味からも、学級（HR）担任のアセスメント力（見分ける力、気付ける力）は、早期発見・早期対応の鍵を握ることとなります。アセスメントした結果を学校内で共有することや、子どものおかれた状態に応じて、教育的支援、心理的支援、医療的支援、福祉的支援、司法矯正による支援といった専門機関による支援につなぐことも重要です。

本アンケートは、子どもたちのこころの状態を客観的なデータでとらえるためのアセスメントツールとして、国立大学法人奈良女子大学・伊藤美奈子研究室により尺度開発・研究され、作成されました。

◇本アンケートの特徴

子どもの状態を「自己肯定感」「学校適応」「家庭適応」「こころの状態」「発達の偏り」の5つの側面（14因子）から多角的に検討することができます。入力シートに子どもの得点を入力すれば、すぐに個票が出てきます。棒グラフでは平均点との比較ができます。さらに、一人ひとりの子どもの状態が、偏差値として14角形に表されます。この14角形の大きさや形で子どもの状態を視覚的に確認することができます。

2. アンケート項目（14因子の説明）

◆アンケート内容について

児童生徒の状態が、下記に挙げる14得点で表されます。

<自己肯定感>

自己評価・自己受容：自分に対する満足感や自分を認める気持ち
関係の中での自己：人から認められ、人と良好な関係をもっている実感
自己主張・自己決定：意見の主張、自己理解、自己決定の強さ

<学校適応>

教師関係：教師との良好な関係を感じている
友人関係：ほっとできる友だちがいる
学力：勉強に対する自信ややる気がある
学校好き：学校に行くことを楽しみに思っている
いじめ（いじめられ感）なし：いじめの被害経験がない→反転して集計

<家庭適応>

家庭での居心地：親子関係の良さ

<こころの状態>

生きる意欲：前向きに生きていこうという意欲の強さ
コミュニケーション力：人との関係をうまく構築できる力
レジリエンス：失敗や挫折から立ち直る力
情緒安定：情緒が安定している→反転して集計

<発達の偏りなし>

発達障害傾向のなさ→反転して集計

3. アンケート実施方法について

アンケート後の児童生徒理解に役に立ていただくため、本アンケートは「出席番号」を明記する形で行います。回答した内容から不利益が生じることを不安に思う子どもたちがいるかもしれません。以下の点を子どもたちに説明してください（①～⑥）。

- ①回答は強制ではないこと
- ②途中で中止してもよいこと
- ③回答内容は成績に影響しないこと

- ④個人情報 は 厳重 に 守 ら れ る こ と
- ⑤表紙の説明をよく読んで、ありのままを回答すること
- ⑥分析はすべて番号で処理されるので、個人名が前面に出ることはないこと

また⑦～⑩については、十分な配慮をお願いします。

- ⑦子どもたちの自由意思で参加できるように、配慮をお願いします。
- ⑧実施中は、互いに回答内容を見ないよう、個人個人が自由に気兼ねなく回答できる雰囲気作りをお願いします。
- ⑨もし、語句の意味や回答の仕方などの質問があれば、適宜、子どもたちがわかる言葉で説明をお願いします。
- ⑩いじめや親子関係に関する言葉に接することで動揺したり、過度な不安を抱いたりという危険性のある子ども（たとえば、現在いじめや虐待を受けている子どもや、親を亡くした子どもなど）については、十分な配慮の上、無理に回答する必要はないことを説明し、実施後も子どもの様子に変化がないか気を付けて観察を継続してください。そのような子どもがいる学級（HR）でアンケートの実施を見送る必要がある場合は、学校の判断を最優先してください。もし、支援が必要な行動が見られる場合などは、家庭等との連携の上、継続的なケアをお願いします。

4. 入力について

アンケート回収が終わりましたら、エクセルシートの「入力用シート」に回答（数字）を入力してください。その際、以下の点に留意してください。

- ◆少し重いファイルになっています。開くのに時間がかかる場合があります。
- ◆最初に「編集を有効にする」「コンテンツの有効化」「マクロを有効にする」という表示が出た場合、それぞれクリックしてください。
- ◆パスワードの入力を求められた場合は、入力してください。
※パスワードは、後日、送付されます。
- ◆入力画面は以下のように表示されます。

この部分をクリックすると小・中・高校の学校種別が現れます。該当する校種を選んでください。

学校種別		中学校		→入力欄				1	2	3	4
個人番号	学校番号 小:10nnn 中:20nnn 高:30nnn	年	組	番号	男:1 女:2 その他:3	名前	私は、自分のことが好きである	教室で人の声がうるさく耳をふさぎたくなることがある	私には、自分のことを理解してくれる人がある	仲間に入れてもらえないことがある	
1	101	20001	1	1	1		3	2	4	3	
2	102										
3	103										
4	104										
5	105										
6	106										
7	107										
8	108										

- ◇個人番号：最初から入っています。
- ◇学校種別：入力用シートの一番上の欄から学校種別（小・中・高校）を選んでください。
- ◇学校番号：自動的に番号（小学校は10001、中学校は20001、高校は30001）が出ます。
この番号は変更しないでください。
- ◇学年・組・出席番号：数字を入力してください。
A組=1、B組=2、C組=3 というように、数字で入力ください。

◆未回答部分：空欄にするか、「0」を入力してください。

※未回答の項目がある場合は、得点は回答した項目から算出され、個票では得点が斜体（イタリック）文字で表示されます。また、すべての項目が未回答の場合は、個票の結果が出せません（個票では「-」と表記）。

◆最後に、実施クラス分の入力がすべて終了していることを確認してください。

5. アンケート活用にあたって

◆得点だけで判断せずに、先生の「目」に見える児童生徒の姿と突き合わせてみてください。

アンケート結果には、先生に見えていなかった児童生徒の姿が現れることもあります。児童生徒が、自分のもっている多様な面を見せていない場合や、アンケートに正直に答えていない場合などは、先生の抱いているイメージとは違った結果になることもあります。先生の印象と異なるときは、特に注意して児童生徒のことを観察してください。

◆個票を見るとき

以下に挙げる3点に注目してください。

◇棒 グ ラ フ…校種ごとの平均点と、その児童生徒の得点がわかります（平均点が高いと、肯定的な回答をしていても偏差値が低くなる時があるので、この棒グラフで確認してください）。

◇レーダーチャート…校種別の相対的な位置づけがわかります。特に配慮が必要な児童生徒の結果に★がつきます。

◇個々の項目回答…児童生徒が答えた回答のあり方がそのままわかります。

◆児童生徒の面談や保護者面談に活用するとき

面談の必要性については、事前に個票の結果をもとに十分に検討してください。必要に応じて専門機関との連携についても視野に入れ、対応をお願いします。

◇個票をそのまま児童生徒や保護者に見せるのではなく、この結果をもとに、「何か困っていることはありませんか？」「家庭ではどんな様子ですか？」等、児童生徒や保護者と話し合う際の資料として活用してください。

◇「教師との関係」「家庭での居心地」については、反抗期の児童生徒の場合、ちょっとしたできごとで低くなる場合がありますので、得点の高低だけに過剰にこだわらないでください。

以上の点に留意し、児童生徒理解のためのツールの一つとして活用してください。

6. 個票の見方について

◆個票は、入力シートの下の方にある見出し「個票（個人）」をクリックし、個票（個人）シートを開いてください。

◆シート左上の個人番号の欄に、該当する児童生徒の個人番号を入れるとその児童生徒の個票が出てきます。

<実施アンケートの個票の見方>（個票に表示されるもの） ※2回実施アンケートは1回目と2回目が表示されます。

① 個人結果（14 得点）の数値

② 個人結果（14 得点）の棒グラフ

前年の対象者の（校種別）平均点と、個人得点を並べて示しています。

③ 個人結果（14 得点）のレーダーチャート

校種別の平均点をもとに算出した偏差値が示されます。

④ 配慮が必要と思われる項目は★印で表示

学 校 嫌 い：「学校好き」得点の偏差値が40 以下

い じ め：「いじめなし」得点の偏差値が40 以下

抑 う つ：「情緒安定」得点の偏差値が40 以下

発 達 の 偏 り：「発達の偏りなし」得点の偏差値が40 以下

◆レーダーチャートは、1回実施でも2回実施でも、得点が大いほほど肯定的な意味になるように示されます。レーダーチャート14 角形の大きさは“大きいほほど適応がいい”、一方“14 角形が小さい、あるいは、へこんだ箇所は心配な得点”と解釈することが可能です。

◆シート右側にある「個票一括印刷」の欄に必要な児童生徒の個人番号を入力すると、指定した範囲の児童生徒の個票が連続して印刷できるしくみになっています。

◆個人結果（14 得点）は、あくまで児童生徒が回答したものであり、正直に回答していない場合等も考えられます。普段の児童生徒の姿と照らし合わせてください。

1回実施アンケートの個票の見方

該当する児童生徒の
個人番号を入力

連続して個票を印刷する場合
個人番号の範囲を指定

こころと生活等に関するアンケート 個票

個票一括印刷

個人番号

開始個人番号 101

終了個人番号 101

101	1	年	1	組	1	番	0
-----	---	---	---	---	---	---	---

(学校番号)

20001

個人得点

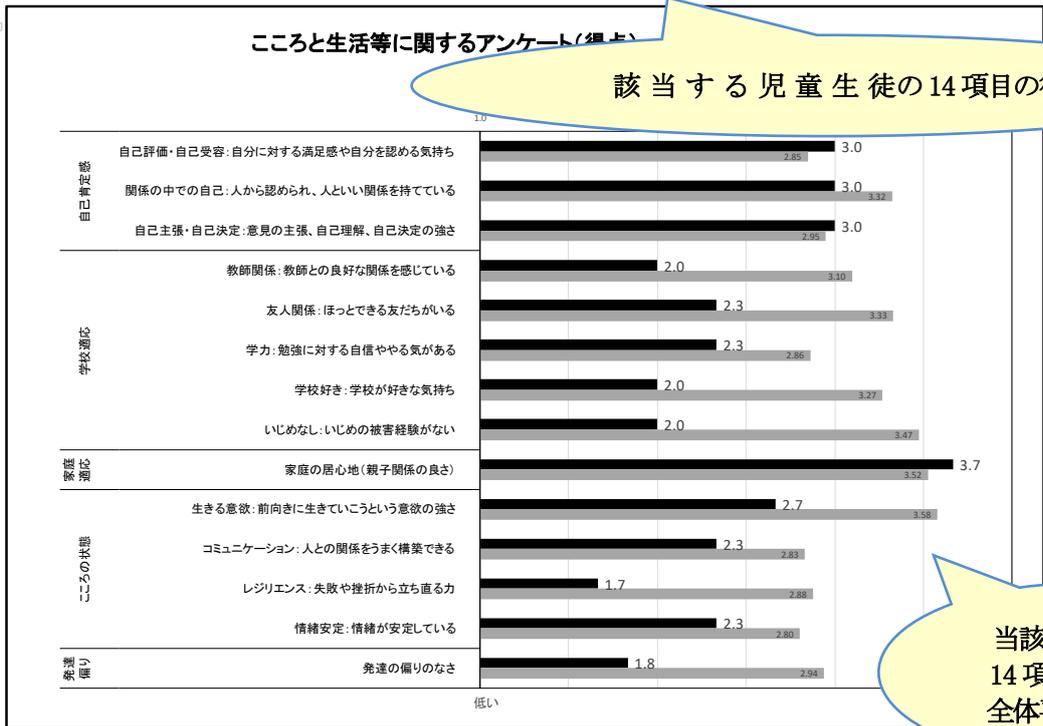
全体平均

自己肯定感			学校適応				家庭適応		こころの状態				発達偏り
自己評価・自己受容	関係の中での自己	自己主張・自己決定	教師関係	友人関係	学力	学校好き	いじめなし	家庭の居心地	生きる意欲	コミュニケーション	レジリエンス	情緒安定	発達の偏りのなさ
3.0	3.0	3.0	2.0	2.3	2.3	2.0	2.0	3.7	2.7	2.3	1.7	2.3	1.8

因子別回答を印刷する

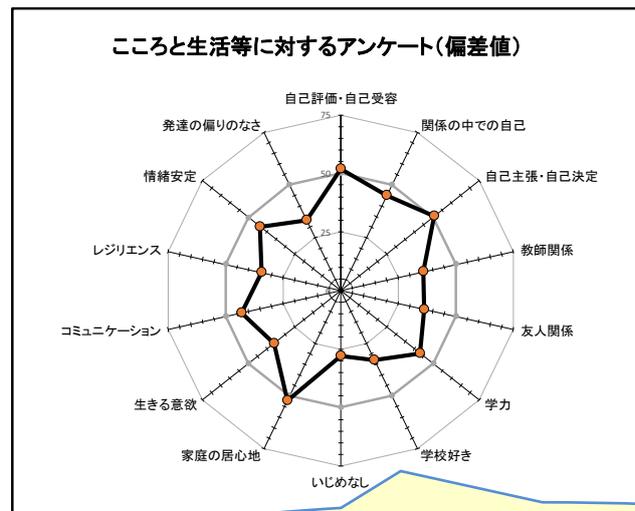
こころと生活等に関するアンケート(得点)

該当する児童生徒の14項目の得点



当該児童生徒の
14項目の得点と
全体平均との比較

こころと生活等に対するアンケート(偏差値)



配慮が必要と思われる項目

学校嫌い	★
いじめ	★
抑うつ	
発達の偏り	★

★印がついた項目について配慮が必要と思われる項目です
★印は下記の場合に表示されます
学校嫌い:「学校好き」得点の偏差値が低い
いじめ:「いじめなし」得点の偏差値が低い
抑うつ:「情緒安定」得点の偏差値が低い
発達の偏り:「発達の偏りのなさ」得点の偏差値が低い

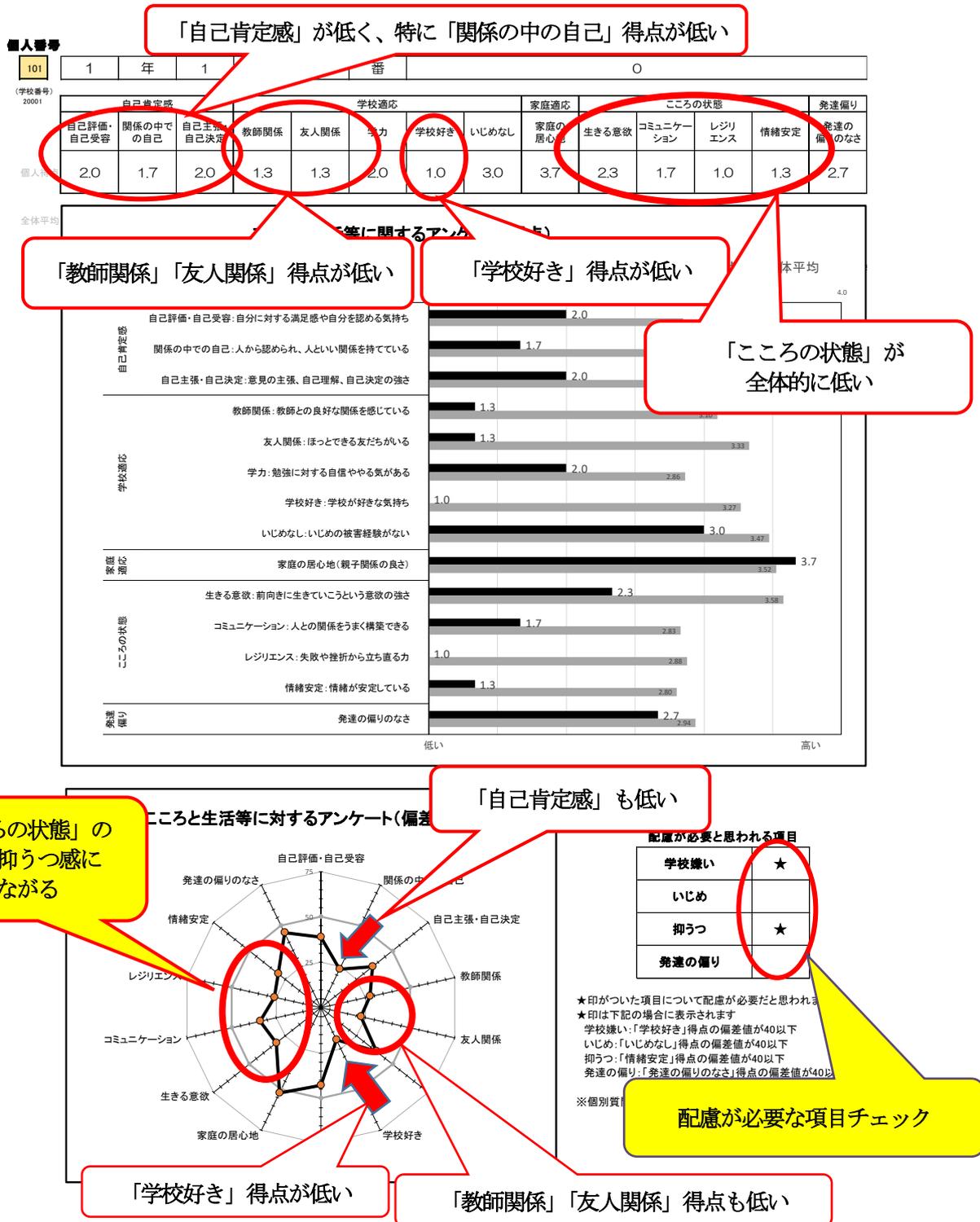
※印は「発達偏り」の項目について表示されます
配慮が必要と思われる項目には★を表示

児童生徒の状態が14角形のグラフに表示
値の小さい部分(へこんでいる箇所)が心配な部分

気になる児童生徒の個票の特徴 <不登校が心配されるケース>

不登校傾向のある児童生徒の特徴としては、「学校好き」得点が低く、「関係の中での自己」「友人関係」の得点も低いことが挙げられます。一方「家庭の居心地」得点は、保護者や家族との関係により、高くなったり低くなったりと状況によって異なります。「こころの状態」を表す4得点が全体として低いことから、抑うつ状態が心配されます。

(不登校が心配されるケースの一例)



気になる児童生徒の個票の特徴 <いじめ被害が心配されるケース>

いじめ被害を受けている児童生徒の個票の特徴として、「いじめなし」得点がかかなり低いばかりでなく、「友人関係」、「学校好き」得点も低くなっています。「こころの状態」を表す4得点も全体的に低く、精神的に不安定な状態です。このような児童生徒の状況を察知したら、早急はその児童生徒を取り巻く状況についてアセスメントし、いじめが認知された場合は、いじめ解消に向けて対処することが重要です。

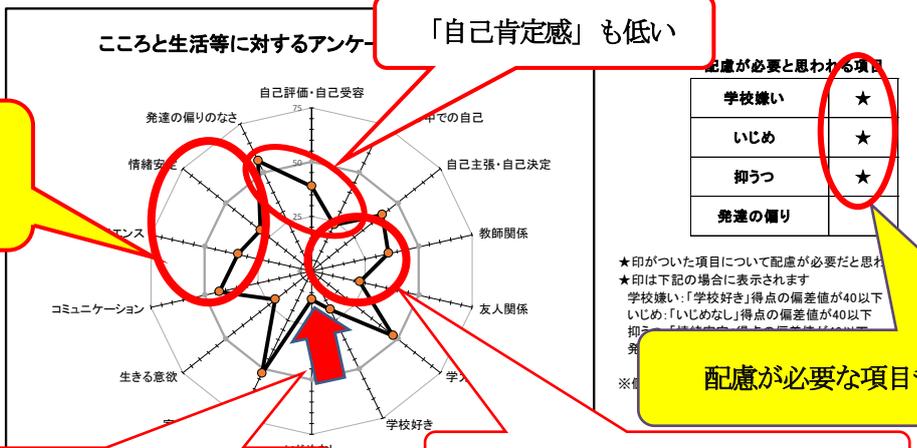
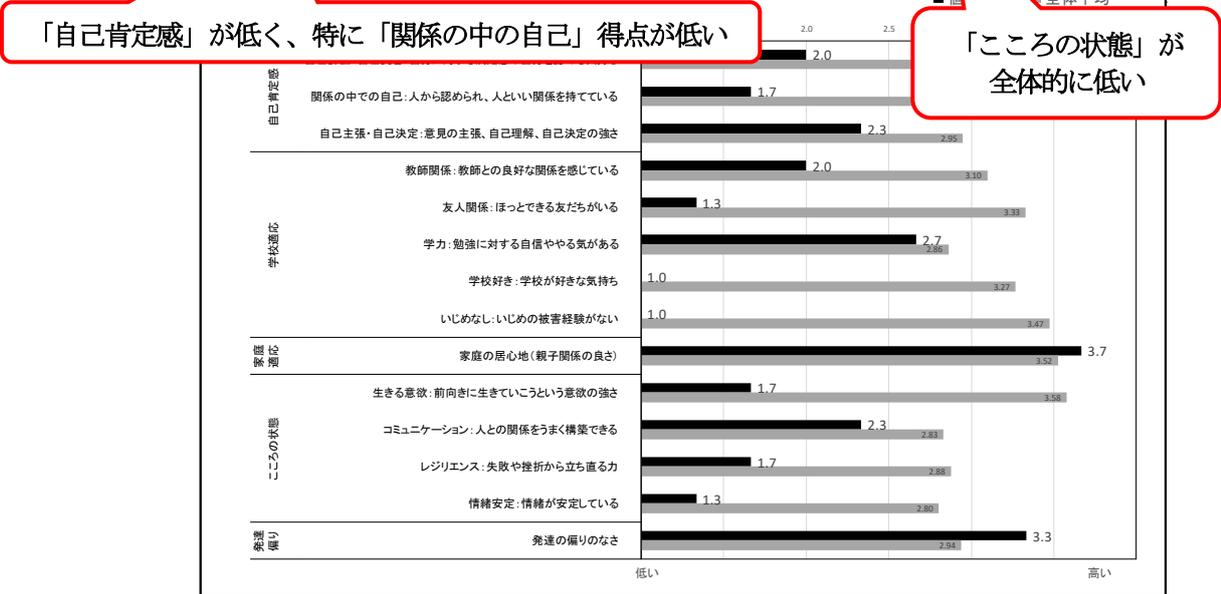
(いじめ被害が心配されるケースの一例)

こころと生活等に関するアンケート 個票

「いじめなし」「学校好き」得点が低い

自己肯定感		家庭適応			こころの状態				発達偏り					
自己評価・自己受容	関係の中の自己	自己主張・自己決定	教師関係	友人関係	学力	学校好き	いじめなし	家庭の居心地	生きる意欲	コミュニケーション	レジリエンス	情緒安定	発達の偏りのなさ	
個人得点	2.0	1.7	2.3	2.0	1.3	2.7	1.0	1.0	3.7	1.7	2.3	1.7	1.3	3.3

こころと学校生活等に関するアンケート(得点)



「いじめなし」「学校好き」得点が低い

「教師関係」「友人関係」得点も低い

気になる児童生徒の個票の特徴 <家庭の状況が心配されるケース>

児童生徒の家庭の状況は、学校生活からはなかなか見えにくいものです。このアンケートによって児童生徒が感じている家庭での居心地（児童生徒の主観）がわかります。「家庭の居心地」得点は、反抗期や家族等との喧嘩などでも一時的に下がりますが、この得点が極端に低い場合は、それぞれの児童生徒の状況に応じて、家庭や専門機関と連携しつつ、適切な支援を行うことが大切になります。

(家庭の状況が心配されるケースの一例)

